
五更

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五更

【Nコード】

N4763D

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

五更Ⅱ 一夜を五等分した時間の称。またはその第五の事。

初更

初更〓現在のおよそ七時または八時からの二時間を指す。

- - - - -

両親を殺された。不死者に。

アイツ等は俺の両親を実験台にする為だけに、殺した。

だから、俺はアイツ等に復讐した。

多くの不死者を滅ぼした。

俺の技量が、知識が、手段が増えるのと同時に滅ぼした不死者も増えた。

いくら滅ぼしても、滅ぼしても。

両親と、両親が過ごした平凡で穏やかな日々は戻ってはいない。

- - - - -

男は島に上陸すると、ある場所を目指して歩き出した。

それは孤島に存在する孤城。

その城は主の名を冠している

―ブラムス城―

夜にのみミッドガルドに現れる孤城。そこには数多の不死者達が徘徊している。

その島と大陸を分かち海。

静かな海面の下は海流が暴れている。

突風が咆哮と共に駆け抜ける。孤島を取巻く海に穏やかな時など無いのだ。

「水魔が魔詩を歌い、船を海の底へと誘う。ワシらは何度もそれを

見た。

あの島へ行くならお前一人で行ってくれ。」

世間一般で言う大金を積んでも、

漁師や船を操る者達は誰一人として島へ渡りたいという依頼を受け
てはくれなかった。

ファルクスは仕方なく一艘の舟を買い、朝焼けと共に島へと漕ぎ出
した。

足音を立てない様に歩きながら、よく辿り着けたものだとなら
すは思った。

一見何の変哲も無い海だが、目指す方向に漕いでも漕いでも向かわ
ない。

突然風が吹き、舟は島でもない陸でもない方向へと向かう。

向かう先の海を見れば海面すれすれの岩が乱立する。

慌てて櫂を動かし、何とか方向転換する。

そうすれば今度は突然海がうねり、波が舟を飲み込もうとした。

四苦八苦してなんとか島に辿り着いた時は、もう夕焼けが辺り一面
を覆っていた。

「あれは夕焼けの色なんかじゃない、血の色だ。」

一人の漁師の言葉を思い出したファルクスは背中に冷たい息吹を感
じた。

それでも夜になる前に島の中心部へ、城の中に潜り込まなければ全
てが水の泡となる。

優美な曲線を描く大剣を背に担ぎ、

血の色から闇の色へと徐々に変化する中を一つの人影が進む。

黄昏時と夜の狭間の時間、島の中心部にファルクスは辿り着いた。

ゆらゆらと闇と共に城の輪郭が現れ始める。

おおおおおおお・・・

風とも城の唸り声ともつかぬ音が闇と共に辺りを包み込んだ。
黄昏時は去り、今は方向感覚を狂わす闇が全てを覆い尽くしている。
薄気味悪い場所だ。

城が確認出来た空間に目を凝らしながらファルクスは思った。

それなりに名の通った不死者を滅ぼしたが、

此処は今まで不死者達と対峙した場所とは空気も闇も格段に違う。

空気は瘴気と冷気を伴い、一つ呼吸する度に一歩死へと向かう様な錯覚。

地面は見えない腕を伸ばし、無数の腐臭と共に全身に纏わり付く。

暗闇の中で聳え立つブラムス城を目視出来ない。

何度も「闇」と言われる場所へ行つた事があるせいで、自分の目が暗闇に慣れるのに時間はかからない。

一般人と比べるとかなり早い方だ。

だが、此処の暗さはそんな自分の目でも未だに城を捉えられない。
冷気の中で吐く息は白い。しかしファルクスは自分の吐く息さえ見る事が出来なかった。

どれくらいの時が経つたのであろうか。

ぼんやりと城の輪郭が見え始め、ファルクスは静かに一歩を踏み出した。

闇に紛れ、呼吸音も足音も立てずに城へと向かう。

城が近づくにつれ、腐臭は薄くなっていた。

反対に瘴気と冷気は濃くなってくる。

今だかつて経験した事の無い瘴気に、肺が新鮮な空気を求め大きな呼吸を要求する。

だが、音を立てるということは自分の存在を敵に教える事になる。

寒さで足が思う様に動かないからといって、ずけずけと歩く事は出来ないのだ。

戦いは既に始まっている。

決意の様な思いを抱き、ファルクスは進んだ。

節くれだち、奇妙な形に歪んだ木が立ち並ぶ庭を抜け、開け放たれた入り口をくぐる。

闇に慣れた視界に城の中を徘徊する不死者達が映った。

アイツ等は殺した。自分の両親と穏やかな時を。俺も良心を殺した。いくら命乞いをしようと、何故不死者になったか聞かされても、滅ぼした。

今回も、そうする。

- - - - -

闇に紛れ込んだ小さな気配は一つの言葉を呼び寄せる。

「面白い。」幾星霜の闇を重ねた声が玉座で呟いた。

一更・甲夜（こうや）

一更〓五更の第一。現在のおよそ午後七時または八時からの二時間を指す。甲夜^{こうや}。

一更は初更と同意。

- - - - -

ファルクスは外に比べると明るい城内を静かに歩いた。

とはいえ城内も城外と同じく、今まで忍び込んだどの場所よりも暗く混沌としている。

徘徊する不死者は侵入者の存在にまだ気付いていないのか。

その侵入者が進む空間は無数の糸だ。

よじれ、うごめき、纏わりつきながら身体をきりきりと縛るような感覚に捕らわれる。

孤城を確認した後、「不死者狩り」への一步を踏み出した瞬間から呼吸は鼻のみに切り替えた。

口を開くと息に僅かに含まれる水分と匂い、更に音で察知される可能性が高くなるからだ。

音を立てずに吸っては吐くを繰り返しながら

前に伸ばしたつま先を静かに床に付けゆっくり踵を張り付かせた。

体重を少しずつ移動させ、後ろの足は踵から持ち上げる。

ぶつぶつと糸が切れる音が聞こえた。

今まで経験した全ての知識と意識を総動員させてファルクスは城内を進んだ。

そして進むにつれて城内に慣れた視界が少しではあるが、明るくなってきた。

床の絨毯は血の色をしている。それは不死者の目の色か、寧猛な獣の舌なのか。

無数の目が自分を監視し、顎の中に隠れた舌の上を歩いている様な感覚。

一歩そして一歩進む。冒険者は一歩また一歩闇へと引き寄せられる。歩きながら状況を分析するファルクス。

不死者王を倒すつもりで侵入したものの、自分が想像した以上にこの城は暗い。

完璧に準備をした。

が、噂や僅かに書き記された文献の知識と実体験は比べ物にならない。

考えあぐね、この場所を後にするという結論に達した。しかし別の思いも確かに存在する。

不死者を一人も滅ぼさずにこの場所を立ち去るとするのは我慢ならねえ。

折角ここまで来たんだ、ある程度力を持つ不死者を滅ぼして出直しやいいんだ。

思いながら進むファルクスの目の前に一つの大きな扉が現れた。

普通の人間であれば長い時間城内をさ迷っている錯覚に陥る。

しかし城を見つけ再び闇の中で見出すまでの間、

此処の闇は方向感覚と共に時間をも狂わすという事をファルクスは身を以って体験した。

開け放たれた入り口をくぐった時から、今まで以上にファルクスは体内時計を意識した。

「冒険者」という肩書きの下にある「不死者狩り」をしてきた体内時計は正確に時間を計る。

この城の主の居場所は、おそらく城の最深部だ。

不死者王の元へ、最深部へ辿り着くには多くの障害と時間を要する。

こんなに簡単にはいかないし、いく筈も無い。

「王」に及ばずとも「男爵」か「子爵」ぐらいの力はある相手が潜む場所だろう。

ファルクスは決断した。

あの扉の向こうの不死者ををブツ潰す。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

戦いの予感に心身が呼応する中、じりじりとファルクスは扉へと近づき、

進みながら前方の扉に目を凝らす。

遠目から見てもそれは分厚くかなりの重量があると判断出来る代物だ。

扉が近づくにつれその様子が見えてきた。

緻密で繊細な彫刻が余すところ無く埋め尽くし、合わせ目はぴっちり閉ざされてる。

床に目をやると同様に隙間が無い。

静かに体重移動しながらファルクスは思案を巡らせた。

どうやって扉を開けりやいいんだ。

あの厚さと重みだ、音が絶対する。

ノックする訳にもいかねえしな。

つつか無駄に豪華だぜ、あの装飾は。

いけねえ、んな事考えてる場合じゃねえんだよ。

と思い直した瞬間であつた。

ぎ
い
い
い
い
い
い
い
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

軋む音を立てながら重い扉が開いた。

咄嗟に後ろに飛び退き、鼻腔で大きく空気を吸い込むファルクス。

突然の出来事に驚いたとはいえ

口を開き、声を出さなかったのは「不死者狩り」としての経験と優

秀さを物語る。

開かれた扉の奥には何も見えず、そこは闇より暗い。

全身が総毛立ち本能が危険を訴えるが、不死者の気配は微塵も感じとれない。

「どれ程の相手か、確かめさせてもらうぜ。」

背中の大剣に手を伸ばしながら初めてファルクスは言葉を発した。向こうが歓迎してくれたんだ、自分の気配を殺す必要はもう無い。ここまで来たんだ、手ぶらで引き返す訳にはいかない。

いつでも反応できる体勢でファルクスはその部屋へと進んだ。

「あの様な輩、私がさっさと殺してやったものを。」
ヴァンパイア・ロードは不満を口にする。

「島の外で派手にやってるらしいから、どんな人間が見たくなったのであるう。」

ワイズ・ソーサリアが名残惜しそうに返事をした。

「そこそこ出来ると見た。我等が王が興味を持たなければ切り刻んでやった。」

ラム・ガーディアンは剣を見ながら声を出す。

「大剣持ちは隙だらけだからな。久々に瞬殺しがいがある人間だ。」
デモンサーヴァントは玉座の間がある方を見やりながら言う。

「なににせよ城が壊されるのは勘弁してほしいのう。」

レッサーヴァンパイアも同じ方向に顔を動かす。

「床は確実に血で汚れるわ。」

「シミ抜きしたいよね。」

サッキュバス達は向かい会いながら希望を口にする。

- - - - -

―人間界ミッドガルド―

今の時代に大きな戦乱は無い。

したがってエインフェリアの資格を持ち合わせる者は数少ない。
名を上げようとして無茶をする冒険者や、国同士の小競り合いで命を落とす戦士。

人を助けようと使った魔術が裏目に出て、恐怖に駆られた群集から撲殺される魔術師等々。

資格を持つものが全くない訳ではないが、

敢えてエインフェリアにしようという気にシルメリアはならない。

「平穏な記憶が多いのであれば、それでいい。」

戦乙女は呟いた。

地上に立つシルメリアの目の前には闇に染まった平原が広がっている。

戦乙女の髪と同じ色をした太陽が出ている昼間であれば

瞳と同じ色をした命が辺り一面を覆い光を浴びて煌めいているのだが、

今は夜であり、暗雲が覆う空は月も星さえも出ていない。

緑の瞳で夜の平原を眺めていた戦乙女は、額飾りを腰から頭上へと移動させた。

「輪廻の輪を目指す方が、彼等にはふさわしい。」

目を瞑った表情と同じ優しい声が夜の平原で小さく響いた。

装着した額飾りから両手を離し、蒼穹の戦乙女シルメリアは腰の剣を確認する。

臉が上がると同時に鋭く光る緑の両眼が夜の闇の中で光を放った。

優しいかった表情は一変し、厳しい顔となる。

背中から伸びた白い羽根が闇夜を切り裂き、静かに細い身体を覆う。
戦乙女は頭上へと視線を向け、蒼穹の空と太陽は月も星も無い闇夜の空へと羽ばたく。

二更・乙夜（いつや）

二更〓五更の第二。現在のおよそ午後九時または十時からの二時間を指す。乙夜^{いつや}。

- - - - -

ファルクスは開け放たれたと扉の奥へと足を踏み入れた。
その瞬間、全身が総毛立ち目も口も開け放たれる。

―此処は、違う―

本能が発した言葉は脳内で凍りついた。

それでも一呼吸すると前へ進んだ。不死者狩りとしての意地と誇りがそうさせたのか。

一歩進む度に体温が奪われ、代わりに恐怖と絶望が与えられる。
ある程度以上の力ある不死者は本能と力しか持たない獣に興味は無い。

彼等はその二つを持ち合わせ、なおかつ知性と理性を持つ者のみに興味を抱くのだ。

気を惹く存在は程度の大小があるが、「神族」「エルフ」「不死者」そして「人間」。

不死者狩りをする人間はその匂いを消すために髪に獣脂を塗る。

そのまま使えば「下っ端」の興味を引くので、髪の匂いと相殺する程度まで薄めて使う。

水のみで薄めるのか、その水はただの水なのか海水なのかあるいは特定の場所の水なのか、

それだけでなく樹液等その他の匂いも混ぜて薄めるのか。

それは不死者狩りをする個人の企業秘密であり、狩りの対象に合わせて変化する。

狩人本人は鼻、口、毛穴などから洩れる匂いを極力少なくする為に狩りの前は食事は断ち、水と塩で過ごす。

ファルクスの場合はまる二日間だが、その期間は「不死者狩り」を行う人それぞれに違う。

十分に動ける体力ぎりぎりの線まで身体を絞る事にもなるので、個人差が出るからだ。

固形物を食べたい欲求に負けず、水と塩で過ごす精神力に加え十二分に動ける基礎体力がなければ冒険はともかく不死者狩りは出来ない。

屈強なる身体と精神。その上で多くの経験と知識を積んでもやはり不死者に殺される者達はある。

25歳という若さであそこまで不死者達を葬ってきたファルクスは稀代の狩人と言っていいだろう。

だがそのファルクスでさえ、この場所は「此処は、違う」と本能が察知する。

全身に緊張をみなぎらせ、前方に目を凝らしながら進むファルクスだが、此処は城外に城内にあった腐臭も瘴気も冷気も無い。

闇より暗い、ただそれだけの場所。

進みながら、背中に冷たい液体が流れるのをファルクスは感じた。

ちっ、汗が出てきやがったぜ。

これ以上進むのは無意味だ、相手の気配すら感じ取れねえ。

立ち止まると背中の柄に手を掛けていた体勢から一気に大剣を構え、恐怖を振り払うかのように大音声で呼ばわった。

「居るんだろ？そのツラ見せろ！！！」

前方を見るファルクスの目に真紅の印が映った。

- - - - -

あか、アカ、朱、赤、緋、紅。

今まで見てきたどの色より、今まで倒したどの不死者達よりも暗く深く、力を秘めた真紅が二つ。

ファルクスの両眼に刻まれたその印は徐々に近づいてくる。

この空間の闇が、二つの真紅の印の為に恭しく道を開けているのか。そう思った瞬間に全てを悟った。

目の前の相手は島へ上陸した時から知っていた。

その相手の名を口にしようとした瞬間、視界を一つの色が埋め尽くした。

「刹那で終わらせてやろう。」

夜の孤城を、闇を支配する声は重くそして暗い。

「不死者お」

ブラムスの拳は一瞬の間にファルクスの鳩尾から背中へと抜け、そして元の位置へと戻った。

ファルクスの膝は折れ、最後にその目に映ったものは凝った闇だった。

構えた大剣は右ひざ横の床の上で優美な曲線を描いた。

闇に吸い込まれる様に上半身は大剣とは反対の方向に崩れていく。

赤い絨毯は同じ色をした液体を飲み込む。

ブラムスは倒した不死者狩りに一瞥もくれず、

一滴の血も付いていない両手を持ち上げ胸の前で組んだ。真紅の両眼は前を見たままである。

扉の遙か先には、デモンサーヴァントとラム・ガーディアンが立っていた。

レッサーヴァンパイア達はファルクスが通った道筋を辿り、城が無事かどうか確認している。

入り口近くで控えていたヴァンパイア・ロードは忌々しげに床のファルクスを睨みつけていた。

静謐で重厚な闇を支配する不死者王ブラムスは不意に視線を天井へと移した。

遙か彼方から一直線に近づく気配。戦乙女の末は此処の魂を見出したか。

開いた口から鋭い犬歯の先端が覗き、そして幾星霜の闇を重ねた声が響く。

「招かれざる客か。」

言い終えると同時に不死者王は踵を返し玉座へと歩み出した。

ヴァンパイア・ロードは入り口へと向かいながら呟いた。

「客、ですか。」城の主がそう言ったからには、自分の元まで通せという意味だ。

ヴァンパイア・ロードや他の不死者達もどんな存在が城に近づこうとしているかは

不死者王には及ばないものの、ある程度察知できる。

だが、まだ気配を感じ取る事が出来ない。

一体どんな存在が来るというのか。また人間か、それとも不死者か？可能性を想定しながら歩く彼の足が止まった。

「神族……？」

声を出した次の瞬間、眉間と鼻に皺を寄せ、入り口を睨む赤い両眼に憎悪の炎が燃え上がる。

「……戦……乙女……」

口は犬歯を剥き出しにしながら呪詛の言葉を吐く。

- - - - -

シルメリアはゆっくりと低空を進んでいた。

街の灯りは小さく、光が無い空の代わりに星を点しているかの様である。

今は地上の殆どの人間や生物達は眠りへと向かう時間だ。

眼下の灯りが一つまた一つ消えてゆく。

エインフェリアを誰一人召喚出来なくてもいい。

今の時代に戦乱は無い。

穏やかな記憶が多ければ多いほど輪廻の輪へと向かう時、冥界の誘惑から逃れられる確率が高いのだから。

自分の思いを噛みしめながら空を移動していた緑の眼差しは遙か前方の小さな光を捉える。

その小さな光は次の瞬間、ふいつと消えてしまった。

空中で止まり、消えた光が在った方向を確認するシルメリア。確かあの方角は……。

「ブラムス城。」

両眼を細めながら発した細い声が闇夜を駆け抜けた。

白い翼を更に広げ上昇気流に乗る。

上空で速度を上げ、一直線に島を目指すシルメリアの額飾りに付いている何枚もの羽根が風を切る。

羽根が揺れる度、蒼穹の鎧を通り抜ける風が隠していた戦乙女の気配を顕わにしていた。

三更・丙夜（へいや）

三更〓五更の第三。現在のおよそ午後十一時または午前零時からの二時間を指す。丙^{へい}夜。

- - - - -

一つの光が夜の孤城へと垂直に落ちる。

戦乙女は闇に取り込まれる事無く、自ら光を発しながら地上へと向かう。

ヴァンパイア・ロードは頭を上げその光景を見ながら太陽が堕ちて来る錯覚に囚われる。

「招かれざる客か。」不死者王と同じ言葉を口にしながら確かにそうだ、と彼は思った。

我等が王が「客」などと言わなければ自分達で捕らえ、踏みにじり、命の火を消し去ればいい。

或いは命を取らない程度に引き裂いて、実験台を欲しがる連中にくれてやれば済む事だ。

あの人間は我等が王の興味を惹いた。曰く「面白い。」と。

今度は醜い神族を招くという。我等は何の言質も与えてもらえない。解っている、我等が勝手に王と城を守っているだけだ。

知っている、自分勝手な大義名分を掲げる奴等を狩るのが楽しいだけだ。

「王の命が無ければ、引き裂いてやったものを。」

憎悪の声はきつく握った拳の中で潰れた。

輝く金の髪を頭上にたなびかせながら、蒼穹のつま先が空中から瘴気の立ち上る地面に触れる。

そして地面へと降り立つ戦乙女の末、シルメリア。

一切の感情を排した緑の両眼は城の入り口に立つバンパイア・ロードから外さず、

頭上で舞っていた髪がゆっくりと蒼穹の肩を包んだ。

この場所は神界とは正反対の場所であり、冥界とも異なる。

人間界に在りながら四界の闇その全てを集め凝縮した孤島。

その島に聳え立つ孤城の主は・・・。

「通せとの事だ。」

冷氣より冷たい声が真っ直ぐにシルメリアへと向かう。

「案内してもらおう。」

シルメリアの鋭い声は冷たい声とぶつかり、二つの声は碎けて落ちた。

声の欠片を踏みながら戦乙女は城の入り口へと歩き出す。

入り口の手前で止まった時、ヴァンパイア・ロードは自分の手を戦

乙女に差し出した。

「蒼穹、剣を預かる。」赤い眼は憎しみで輝き、開いた口に生える二本の犬歯。

シルメリアは険しい表情はそのまま、だが口は笑いの形を描いた。「確かにそうだ、私は滅する為に此処へ来たのではない。」

言い終えると戦乙女は剣を腰から離し、ヴァンパイア・ロードの両手へと置いた。

神族からしてみれば不浄で厭わしい場所であろう城内へと二人は足を踏み入れた。

不死者からしてみれば憎悪の対象でしかない神族と剣が城内を進む。不死者王ブラムスの言葉は絶対である。

闇に潜む無数の赤い眼は敵意、怨恨、怨念など様々な感情を以って闇の中で輝く戦乙女を

玉座の間へと通した。

無言で赤い絨毯の上を進む二人に開け放たれた扉が見えた。

「この先でお待ちだ。」言い終わるとシルメリアの前でヴァンパイア・ロードは立ち止まった。

少し離れた場所を歩いていたシルメリアは

そのままヴァンパイア・ロードの背中を追い越し、預けた剣の横を通り抜けた。

赤い襷が足音を吸収し、鎧の上から、額飾りの上から瘴気と冷気が舌なめずりする。

いつでも喰らってやると言わんばかりに。

薄い氷の上を蒼穹の戦乙女シルメリアは歩き、そして玉座の間へと入った。

「入るぞ。」戦乙女の冷たい声は静謐で重厚な闇を貫く。

「そういう台詞は入る前に言うものだ。」

何の感情も無い不死者王の声が闇を支配した。

闇より暗い玉座の間。そこでシルメリアは部屋の中央で横たわる人間の身体と大剣を見た。

「私の仕事をさせてもらう。許可願おう、不死者王。」立ち止まり、シルメリアは言った。

「最低限の礼儀はわきまえているようだな。」言葉と同時に真紅の印が二つ闇に刻まれる。

「他人の家で許可も得ずに好き勝手する程、私は無礼者ではないぞ。」

城を家とは。例えば人間の様だ、と思いながらブラムスは返事をする。

「好きにしろ。」

その言葉に僅かではあるが面白そうな声音が含まれている事にシルメリアは気づかない。

「では、好き勝手させてもらう。」言い終わるとシルメリアはファルクスへと歩み始めた。

おぼろげに光るその姿が一步一步中央へと近づくにつれ、険しい顔

が少しずつ優しくなっていく。

そしてシルメリアはファルクスの側で歩を止めた。

床の大剣へ立ったまま手を伸ばし、静かに起こった出来事を読む。

- - - - -

シルメリアの発する光に呼応するかの様に小さな光が浮かんだ。

「ファルクス。」呼び声のする方へと光は進む。

不死者王は初めて戦乙女がエインフェリアを召喚する場面を見た。

己の力で光る事は叶わず、闇の中で輪廻の輪を見出す事が不可能な魂は

戦乙女の発する光を呼び水として自ら光る、か。

足を組み、肘を付いたまま不死者王は召喚の続きを眺める。

「エインフェリアになるか？」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！何がどうなってんだよ！」

存在だけではない、自らの意思も音として発する事が出来る。

人間の意志など全く意に介さない神族にあつて、この能力はある種の異端であろう。

より多くの駒を欲するオーディンが三交代で常に使役したがるのも頷ける。

ブラムスの顎が僅かに持ち上がり、真紅の眼光は鋭さを増した。

「ファルクス、お前は不死者王に挑み、瞬殺されたのを憶えてないのか。」

「し・・・瞬殺・・・。否定はしねえけどな、あんまりだぜ・・・。

」

「不死者王自ら相手をしたという事は、それなりの力があるという意味だぞ？」

その差がヴァルハラとミッドガルド程離れていようとな。」

「・・・・俺をエインフェリアにしようとするからには、

あんたは戦乙女なんだろうけどなあ……………」

小さな光の輝きが強くなる。

「その言い方、酷えだろうが！」

「ならどう言って欲しい？望む言葉を言ってやる。」

「……………」

「その人間は狩りの対象と同じだ。」

不死者王の声にシルメリアの前で光るファルクスの魂が震えた。

「……………不死者王の方が酷いぞ……………」

瞼を閉じて顰めた眉間を人差し指で揉みながらシルメリアは言った。

「始めは復讐という感情だけだった。それは徐々に正義という名の
下に隠れた己の快楽へと変化した。」

ブラムスが発した声は闇に質量をもたらず。

その闇に押しつぶされそうな小さな光は何も言わない。それが事実だからだ。

ファルクスはいつしか不死者を滅する事に溺れていた。

頼まれて村を襲った連中を滅ぼし、そしてその後村人から向けられた賛辞、感謝。

料金は正当な対価であるが、それに付随する感情が次の狩りへの糧となる。

良心を殺したファルクスに憎悪の金切り声を上げながら二度目の骸になる不死者。

その骸を、骸から塵へと変化する様子を見る度に昂ぶり熱くなる感覚が心と身体を支配し

それが次の狩りへと糧となった。

自覚した時には、もう引き返せない深みに落ちていた。

さて、私が投げた波紋を戦乙女はどう鎮めるか。

こんな酔狂もたまにはいいだろう。

闇に覆われる事無く、仄かに光るシルメリアと小さな魂を不死者王は眺める。

- - - - -

静謐が支配する闇の中、小さな光が小さな音を発する。

「・・・・その通りだ・・・・俺は自分の快樂の為だけに滅ぼした・・・・。」

戦乙女の指が眉間から離れ、瞼がゆつくり持ち上がる。

「始めからそうではなかった。違うか？」

「・・・・始めはな。でも・・・・後の方が・・・・長げえんだぜ・・・・。」

「なら輪廻を目指すか。城の外まで私にくっついていればいい。後はファルクス次第。」

「・・・・け・・・・ん・・・・。」

緑が強く光り、小さな光を睨みつけた瞬間、ファルクスはヤバイと思った。

「貴様、それでも男か！ファルクス！！」

シルメリアの怒鳴り声が玉座の間でわんわんと響く。

「戦乙女の方が酷い。」持ち上がった口角から鋭い犬歯の先端が現れる。

「悩むくらいならエインフェリアになれ！

そして神という正義の名の下に不死者を滅せよ！！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！あんた、親玉のアジトで何言ってるだ！！

俺を殺す気かよ！！」

「主の許可は取ってある。好き勝手していいとの事だ。」

低い声と視線は玉座に座るブラムスへと走る。

真紅と緑が静寂の中で火花を散らし闇が張り詰めた。

時が玉座の間を隈なく巡り、そして過ぎ去る。
緊迫した空間でファルクスがぼそりと呟いた。

「戦乙女は、俺が欲しい言葉をくれた……。」

俺は、やっぱり不死者を赦せない。アイツ等は奪った。
復讐したい一心でアイツ等を滅ぼす度、心地よい感情が俺を捕らえた。

それは俺をがんにがらめにした。まるで罠だ。

やっとアイツ達と同じだと気付いた。だから元の俺に戻りたかった。
明るい思い出が湧き上がると、それを奪った不死者への暗い感情も沸き上がる。

そして復讐する度に俺の心と身体を捕らえる罠。

戻りたい、滅ぼしたい、罠から逃れたい。何度も何度も考えた。
大切な者達を奪った存在の頂点に立つ不死者王を倒し、それを最後に剣を置くという答えを見つけた。

その相手に自分という存在を誇示する為に滅ぼし、そして戻りたいの繰り返しだった。

不死者王という存在は、この城は、本能が死を確認し、感情が怯え、身体が畏怖する。

人間の「死への恐怖」は快楽や悦楽とは比べ物にならない。

後者は生きていてこそ、それを味わえる。

「死への恐怖」を身を以って体験したら、二度と剣を持ちたいとは思わなくなる。

でも俺は、本当は大義名分が欲しかった。それは自分で自分に与えたんじゃない意味が無え。

明るくて眩しい大義名分が、欲しかったんだ……。

「ならばファルクス、私と共に在れ。」

胸の前でシルメリアの両手は空間の珠を抱く。小さな光、魂はその両手の中へと進む。

俯き両手を見てた戦乙女微笑みながら瞼を閉じ、自分の胸へと光を

導いた。

闇の中で戦乙女の全身は僅かに輝きを増し、その両手が鎧に触れた瞬間、金色の髪がゆるやかに舞い上がりそして静かに元へと戻る。

小さな光は蒼穹の鎧へと消えていった。

玉座で悠然と構える不死者王はその様子を眺めていた。

運命の女神、か。故意であろうと偶然であろうと確かにそれと共に在る。

あの人間は選定された後、蒼穹の下でエインフェリアへと変化する。戦乙女の器がそれをもたらすのか魂なのかは判らぬが、それは運命の変化には違いない。

シルメリアは俯いたまま表情を改めると真紅の印に視線を向ける。戦乙女の末は微動だにしない不死者王ブラムスへの一步を踏み出した。

四更・丁夜（ていや）

四更〓五更の第四。現在のおよそ午前一時または二時からの二時間を指す。丁夜^{ていや}。

- - - - -

玉座の少し手前で足を止めたシルメリアはブラムスに対して声を出す。

「好き勝手は終わった。」

「中々興味深い。」

「興味深いのはお前の方だ、不死者王。」

言葉に力が宿り、会話でさえ剣を交えているかの様である。

「ほう。私のどこが興味を惹く？」不死者王は訊いた。

赤い襷を踏みながら蒼穹の鎧は玉座へと進む。

玉座の肘掛に置いてある不死者王の腕は獐犢な鉤爪を自在に操る不死者王の武器でもある。

一見無造作に肘掛を掴んでいる様に見えるが、何時でも如何なる存在も無慈悲に裂く。

戦乙女はその不死者王の腕に自分の手を置き、寄せた蒼穹を支えた。そして不死者王の胸元で体を反らし、額を見上げ、手を伸ばす。

白く細い指が額に触れた。

「王の印。」

「前にも言ったな。何故それが興味深いのだ。」どうでもいい事のようにブラムスは言った。

「不死者王にその資質あり。それは解る。だが他の条件が揃っていない。」

沈黙が言葉の続きを要求する。

「治めるべき領土、民。不死者王は己の国を持たず、民を総べては
いない。」

王の印を見上げながらシルメリアは言った。

「成る程。間違つてはいない。」

「オーデイン様とも、スルトとも、人間の王とも光が違う。」

「お前以外も見える存在がいるのか？」

顎を引きシルメリアを見下ろしながらブラムスは問う。

額から視線を外した緑の双眸は真紅の双眸を見た。

「さあ？」

シルメリアは首をかしげ、微笑んだ。

「自分以外の誰かに言ったのは不死者王しかない。」

闇の中で輝く光。一つは不死者王が発し、もう一つは戦乙女が発す
る。

「因みにその印とやらはどう見える。折角だから聞いておこう。」

シルメリアはブラムスの腿に膝を乗せ、体を添わせた。緑の双眸が
額へと近づく。

「細い、とても細い筋が額を奔る。」

数本の指は視線と共に光をなぞり、口は真紅の双眸の前で吐息を吐
く。

「光は金色に輝いている。」

ブラムスの視界でシルメリアの緩やかな曲線を描く金髪が揺れた。

「お前の髪の様にか？」

不死者王の顎を支えていた手は鉤爪と共に伸び、輝く髪をかき上げ
た。

「まさか。私の髪など及びもしない。」

笑いの形を作った唇から言葉の続きが洩れる。

「ずっと、綺麗……」

柔らかな声が闇へと溶けていった。

- - - - -

「おい！戦乙女！！」

不意に体内からの響く声。さっきエインフェリアになったばかりのファルクスだ。

二人の体が近いせいか、ファルクスの叫びが必死なせいなのか。その声はブラムスの耳にも聞こえた。

「何だ。」

体勢はそのままにシルメリアは返事をした。

「俺の剣、あのままなのか？」

「そうだ、あのままだ。」

「頼む！持ち出してくれ！」

「何を言っている。無理だ。」

額から指を離し、シルメリアの双眸は真紅の双眸と重なる。

「担いで出て行くだけじゃねえか！それくらい朝メシ前だろ！」

金髪に埋もれていたブラムスの手が静かにシルメリアの首へと移動する。

「不死者王は通せと言った。行きは保障された。

この部屋では好き勝手にいいとの事だ。この場所も保障されている。

後は、言わなくても判るな。」

おまけにファルクスが眠っている間、シルメリアは「好き勝手は終わった」と言った。

この場所で戦乙女が自由に振舞える時間は既に終わっているのだ。シルメリアの説明にファルクスはあの冷気を思い出した。

魂が緊張した声で戦乙女に問うた。

「・・・どうする？」

「部屋から出たら剣を取り戻し、城外へ出るつもりだ。」

細い首を支配する大きな手。何時でも殺せる体勢でブラムスは笑う。
「目の前の敵に作戦を暴露しては意味が無い。」

「どのみち血路を開かねばなるまい。御見通しの上で通したのだろ
う？」

二人の両眼が強い光を放つ。

エインフェリアとして眠りに就いていたファルクスは、
気掛かりだった剣の事を思い出すと同時に叫んだ。

そして知った自分の状況、いや戦乙女の状況は最悪だ。
俺、目覚めなかった方が良かったのかもしれないぜ。

「ファルクス、どのみちあの太剣は妖刃へと変化する一歩手前の状
態だ。諦める。」

「・・・妖刃だと？ほざくな！」

「多くの不死者を切り裂き、刃に付いた塵は刀身の隙間へと付着し
ている。」

大抵は手入れをきちんとすればそうはならないのだが
滅した数が多すぎた上、お前の感情が強く絡み付いている。」

シルメリアの言葉の続きをブラムスが担った。

「強すぎる憎悪は次の憎悪を呼ぶ。」

「・・・・・・・・・・。」

不死者を憎むファルクスがそのまま扱ってれば、不死者を求める
妖刃。

ファルクスが手放せばせめぎあっていた二つの内の一つ、

不死者の憎悪が勝り人間を求める妖刃となる。

打った刀鍛冶はおそらく無心である太剣を打ってはいない。

優美な刀身はミッドガルドに出でた時から暗い思いを秘めていた。

それが不死者王と戦乙女、二人が出した結論だ。

「それでも両親が俺にと無理してまで買ってくれた、大切な剣なん
だぜ・・・。」

哀しみに染まった声がぼつりと呟く。

シルメリはゆつくり玉座から離れ、ブラムスは玉座から静かに立ち上がる。

首を押さえられたシルメリアは仕掛ける機会を狙い、ブラムスは反応を窺う。

「何とかしてはみる。過度な期待はするな、ファルクス。」

正面から横へと顔を移動させながら戦乙女は言った。

「本当か！」相手が相手だ。結果を期待する方が酷である。

それでも試みてはみるという返事にファルクスの声が明るくなった。

「だから、今は眠れ。」

「最後に一つだけ、いいか？」

「一つだけなら。」

「俺、戦乙女の名前を知らねえ。」

緑の眼球が後方を確かめるべく動く。そして低い声が赤い絨毯へ落ちた。

「シルメリア。」

言い終えるとシルメリアは膝を曲げ、床へと沈む。同時にファルクスの魂も眠りへと落ちた。

ブラムスの手は分裂した額飾りを吹き飛ばし、細い金の線を幾筋も空中に撒き散らす。

片膝を付いていた体勢の戦乙女へもう一方の拳が迫る。

上体を伸ばし、飛び退きながらそれをかわしたシルメリアは横たわるファルクスの亡骸と大剣へと走った。

そして大剣を手にし、構えた。

「それが狙いか。」

何度か三人の戦乙女と対峙した事がある不死者王も、大剣を構える戦乙女は初めて見る。

「状況は私に不利だ。落ちているものは何でも使う。」

隙の無い構えを取るシルメリア。

確かに状況は不利だ、だがお前は常同しているエインフェリアを呼び出さない。

色々面白い事をしでかしてくれる、この戦乙女は。

真紅の両眼が凝った闇を支配し、犬歯と共に揶揄の言葉が現れる。

「私を楽しませる事が出来たなら、見物料を払ってやろう。」

応える緑の両眼は光り、凄絶な笑みを浮かべた顔が返事をする。

「確かに聞いた。」

- - - - -

言い終えると同時にシルメリアは赤い絨毯を蹴り、走り出した。

戦乙女の後ろにある大剣の剣先は不死者王へと斜め上に斬りかかる。上体を反らしてかわすブラムス。そして横に伸びた鉤爪は蒼穹の胸へと水平に襲い掛かる。

斬りかかる勢いそのままにシルメリアは鉤爪を避け、持ち上げた大剣の高さを変えず、

それを正面の頭上で構える体勢を取ると同時に戦乙女は上へと跳躍する。

「うおおおおおー！ー！ー！ー！」

渾身の力でシルメリアは振り下ろした。

ブラムスは自分へと振り下ろされる大剣を見た。

まるで「人間」の様だ、お前は。

力量の差というものを知っていながら、挑むという愚かさ。

何が何でも生き延びる、その為なら何でもする「生」への執着の様な意思。

その意思を貫き通す為、相手の手に乗る事も厭わない。

だが戦乙女は「神族」だ。

「魂」があのみまであったら、輪廻の輪へと向かう事は永久に無い。見出した、だから助ける。緑の両眼はそう言っている。

ミッドガルドの、人の人生の如くに烈しく、そして熱い光。

「お前は私の興味を惹く。」

不死者王は拳で迫り来る刃の腹を軽く払った。

大剣は速度はそのままに、今度は天井を貫こうとした。弾かれた勢いでシルメリアは空中で仰け反り、そのまま回転しながら大剣を手放す。

大剣は真っ直ぐに豪奢な天井に突き刺さる。

空中でバランスを取った手が舞い上がる金髪に隠れた。

戦乙女は髪の下の右手で現れた矢を握る。

弾かれた勢いに落下速度が加わり、光は闇へと加速した。

不意に伸びてきた左手をブラムスは首を傾げて避け、箒手が覆う右手を矢ごと掴んだ。

鉤爪を持つ獰猛な左手。その指の間を抜けた矢の先端はブラムスの眉間の少し手前で静止する。

ブラムスは左手で掴んだ右手を持ち上げた。

シルメリアのつま先は空中から床へと向かった。

ごりっ。

鈍い音の後を小さな呻き声が続く。

激痛が右手を襲った瞬間、シルメリアは仰け反りながら呻き、そしてうなだれた。

戦乙女は右手を潰され、吊るされた。そしてつま先は床に触れさせてもらえない。

これでは反撃を狙う時、いや何かしら行動を起こす前に「前振り」をしなければならぬ。

否、不死者王に「前振り」を「させられる」。

不死者王ブラムスは無表情のまま前方を見ている。

「不死者王は全て御見通し、か。」乱れた金髪と共に俯いた頭から小さな声が洩れた。

五更・戌夜（ぼや）

五更〃五更の第五。 現在のおよそ午前三時または四時からの二時間を指す。 戌夜^{ぼや}。

- - - - -

勝敗は決し、勝者に吊るされた敗者の姿は闇の中で仄かに光る。

「長引けば不利になる。」 不死者王の声は何の感情も無く、ただ事実を告げた。

「此処は不死者王ブラムスの居城。 その主が相手だ、短期決戦しか選べない。」

俯いた顔から静かな声が赤い襷へ落ちる。

「大剣で誤魔化した奥の手まで見抜かれていた。 あれが精一杯だ。」

「誤魔化した上に還元の方法が有効か否か、確認したな。」

「目くらましついでに剣の状態を確認した。 夜明けが近いから。」

「あの状況で幾重も仕掛けたという事はあわよくば滅ぼそうという魂胆か。」

俯いた顔が動き、緑の両眼はブラムスを射抜く。

ブラムスは拳をゆっくり動かし、きつい眼差しを真紅の正面へと持ち上げた。

「なあ、シルメリアよ。」

睨む表情そのままにシルメリアは笑った。 それが戦乙女の答えだった。

そして蒼穹の戦乙女は不死者王に答えを要求する。

「不死者王を楽しませた事にはならないのか？」

相手の手に乗り玉座の間までは辿り着く事が出来た。

そこでの行動の自由が確保され、ファルクスを召喚した。

その後、興味深いと不死者王は言った。

だから「見物料を払う」という言質を引つ張り出すことが出来た。

あの言葉までの私の行動はおそらく「見物料」に値する。

その後、私の取る行動を「楽しい」と思うかどうか、「支払う」価値があるか否か。

決めるのは私ではない、不死者王ブラムスだ。

我が主神が滅ぼし得なかった唯一の存在。

数多の種族と多くの命を葬り去った強大で獰猛なブラムスの手。

初めからこの手が全てを握っていた。

そして価値が無ければ私が滅ぼされるだけの事。

シルメリアは不死者王の両眼から視線を外し激痛が襲い続ける箇所を、それを覆う手を見つめる。

ブラムスの視界に戦乙女の横顔とその顔を覆う金色の髪が広がる。

選択権も、着いた先の保障が無いと知った上で此処に来た戦乙女。

大剣を構えた後引き返す事をせず、

力の差を知りながら、私の手の上と知っていながら、それでも一歩も引かなかった。

此処へ来るという前提で戦う準備をしていた。

あらゆる場面を想定するのは戦う者としては当然の事。

弓と矢を構えれば隙が出来る。神技を使おうものなら尚更だ。

己の隙は極力減らし、私の隙を誘った。それしか勝機が見出せない故に。

――隙あらば滅する――

闇夜の空を、そして矢の様に一直線に飛び込んできたシルメリア、お前は確かに私を楽しませた。

ブラムスの眼前で戦乙女の横顔と姿は髪と同じ色をした太陽の様に光り、そして輝く。

ブラムスの右手が静かに移動し、鉤爪と共にゆっくりと金色の髪へ沈んだ。

突然の行為に驚いた顔をして振り返るシルメリア。その顔を見ながら不死者王は口を開く。

「ついて来い。」

言い終わるとブラムスの左手は潰れた箆手を離れた。

もう一方の右手を金色の髪がさらさらと撫でる。

横倒れになる蒼穹の体を赤い絨毯が抱きとめた。

- - - - -

突然の出来事にシルメリアは混乱した。

何がどうなっている？

剣は預けたままだし、右手は潰されたから弓を手にする事は出来ない。

最悪弓を武器としても、不死者王相手では意味が無い。

もう一度仕掛けるにしても左手しか残っていない。

さっきはその左手で相手が避ける動作を誘った。

だがそれさえも読まれていた、だから私は後が無い。

なのに、何故、不死者王はもう一度確かめた？

左手で体を起こしながら肩を包む金髪を見るシルメリア。

髪から視線を移した先の不死者王は扉の方へずんずん歩いて行く。

どうやら「見物料」を「払う」気らしい。

相手の気が変わらない内に「見物料」を受け取った方が得策だ。

「ちょっと、待って。」慌てて立ち上がり遠ざかる後姿に声を投げると、

「待つ必要は無い。」間髪入れずに投げ返された。

戦乙女は力チンと来た勢いそのままに叫んだ。

「天井の剣を抜く間だけじゃない！不死者王はケチなの？！」

立ち上がり左手を思いつき握り締めるシルメリア。

右手は力なくだれて、箆手は砕けている。

鎧と同じ色の足元には折れた矢が転がっていた。

ブラムスの足は止まり、前を見ていた顔が声を出しながら横を向く。

「好き勝手とやらは、終わってはいなかったのか。」

闇が隠す不死者王の口元は笑みの形を作っていた。

上に刺さった大剣の真下まで来るとシルメリアは翼を広げ、豪華な天井を目指す。

左手で柄を握るとそれを折りたたんだ。

蒼穹の身体の正面は扉を向き、その姿は闇に浮かんで仄かに光る。

凝った闇が小さく呟く。かつて見た、そして何時か見るであろう。

暫く天井を見つめていたシルメリアは小さく身体を前後に振り、剣を引き抜きにかかった。

大剣は少しずつ天井から離れていく。

床で揺れる光は明滅するかの様だ。

赤い絨毯が小さく吐く。かつて見た、そして何時か見るであろう。

- - - - -

剣先が完全に天井から離れ、戦乙女はそれを空中で回転させながら着地した。

抜いた大剣を左肩に乗せ、足早に不死者王へと急ぐ。

横顔は何も言わず前を向き歩き出した。その後を輝く頭がついて行く。

入り口で控えていたヴァンパイア・ロードを追い越し、二人は城の入り口へと向かう。

シルメリアは興味深々といった風にあちこちに視線を移しながら少しずつ歩を進める。

「遅い。」前方を歩く不死者王が言った。

「この城は暗いから、ゆっくり歩かないと。」少し楽しそうな声が答える。

「今度は物見遊山か。」

「美しい城だな、と思って。」

「美しい？」

「私が属するヴァルハラ建物や様式とは全く違う、対極の存在。」
蒼穹の戦乙女シルメリアは優しい表情で言葉を続ける。

「それでも美しいものは美しい。」静かな声を大きな背中が受け止めた。

透明な声は尚も続く。

「城の住人達も礼儀正しい。私を襲わなかった。」

城の入り口が見え始めた場所でブラムスは足を止め、振り返る。
後を歩いていたシルメリアは止まった。

向き合う二人の間の距離は互いに手を伸ばしてもまだ届かない。
「後は好きにするがいい。」幾星霜の闇を重ねた声が響く。

「ブラムス。」柔らかな声と表情が返事をし、闇が抱く仄かな光は微熱を帯びる。

そしてシルメリアは笑った。

「ありがとう。」

同時に歩き出した二人の姿は一瞬重なり、そして離れていった。

- - - - -

城の入り口から一步外へ出た場所でシルメリアは振り返り、ヴァンパイア・ロードに言う。

「剣を返してもらう。」

ヴァンパイア・ロードは何も言わずに両腕を伸ばした。

シルメリアは肩に担いでいた大剣を地面に軽く突き刺し、潰れた右手で剣を受け取る。

多くの不死者を滅した剣を装着する戦乙女を見ながらヴァンパイア・ロードは問いかけた。

「もつじき夜明けた。還元の法を施すか、蒼穹。」
その赤い視線が剣から大剣へと移る。

「とりあえずは朝一番の日の光に何度か当てる。

完全に元に戻るには時間が必要だ。」戦乙女が返事をした。

光、水、大地、風。四つの要素で還元の法を施し、元の状態に戻す。最後に火の要素、力ある刀鍛冶を探して打ち直しを依頼し、暗い思いを火花と共に昇華させる。

ファルクスが手放した状態であれば還元の方法にかかる時間と要素は今の半分以下で済んだ。

だが、不死者王の拳が触れた。

ただそれだけで手間も暇も倍以上かけなければならない。

不死者王ブラムスとは、そういう存在なのだ。

剣を佩き、大剣を抜きながら戦乙女はヴァンパイア・ロードを見た。

「何とかすると言った手前、何とかせねばな。」

「我等が王は御見通しだ。」

羽虫に城の周りをちよろちよろされては、煩くてかなわぬのだろう。

「

成る程。」言いながら大剣を真つ直ぐ頭上へと持ち上げ戦乙女の姿は一本の光の筋となる。

刀身は垂直から水平へ、そして垂直へと移動する。

蒼穹の胸が刀身を抱き、同じ色をした左手が柄を握る。

右手は優美な弧を描きながら下へと向かい、白い翼は背中から闇へ広がった。

白い羽根が辺り一面に舞い散る。

「私として使役される身だ。いつ呼び戻されるかは我が主神次第。」

「さっさと出て行け、神族。」

答える様に緑の視線は天空へと向けられた。

白い翼は大きく羽ばたき、光は降り立った時の様に垂直に上昇する。
「招かれざる客」が去ったのを見届けたヴァンパイア・ロードは踵を返し城の中へと消えた。

蒼穹の胸に大剣を抱き東の空を目指す戦乙女。

還元の法で元の状態にし、打ち直し、後は人の立ち入らない静かな場所に剣を安置すればいい。

それでも人の手から手へとこの剣は彷徨い歩く。

エインフェリアとなった魂へ、そして大剣にシルメリアは囁いた。

長い時と多くの場所を経て、いつの日か再び出会い、その手は柄を握るだろう。

私は運命を司る。

そういう事だ、ファルクス。

暗雲が覆う空に薄く開いた瞼の様な雲の切れ間。それを見つけたシルメリアは空中で静止した。

鳴り止まない痛みを訴える右手を見た後、眼差しを前方に向けながら戦乙女は呟いた。

「不死者王ブラムスは御見通し、だな。」

もうじき瞼の間から太陽が現れる。

- - - - -

ヴァンパイア・ロードは玉座の間へと向かう。

そこが近くなった時、珍しく扉が開け放たれたままなのに気がついた。

中を見ればサツキュバス達は赤い絨毯のシミ抜きをしていた。

亡骸はラム・ガーディアンとデモンサーヴァントが持ち出したのだろう。

レッサヴァンパイアはワイズ・ソーサリアにつかまり、天井の修理をしていた。

玉座の間の中央まで進んだヴァンパイア・ロードは口を開く。

「蒼穹は空へ還りました。」

彼は今までの経験で不死者王の返事を期待していなかった。

それでもいつもの様に一縷の望みを抱き、一礼を執り退出しようとした。

「曰く」

不死者王の声が闇より暗い玉座の間に響き渡る。

玉座の間の不死者のみならず、城に存在する全ての不死者がその言葉を聞こうと動きを止めた。

不死者王ブラムスは追っていた気配が止まったのを確認した。

真紅の双眸を睨み始める。

「美しい城、礼儀正しい住人、だそうだ。」

あれは私の興味を惹く。

何の感情も含まない。ましてや不死者王自らの言葉でもない。

だが、発したのは確かに不死者王なのだ。

小さなさざ波のように闇は蠢き、城は風と共に唸り声を上げた。

おおおおおおお・・・

ブラムス城は島を取巻く闇と同化した。

東の空は徐々に明るさを増していく。

夜はミッドガルドから立ち去ろうとしていた。

- - - - -

そして月日は流れる。

呼び出されたエインフェリアは辺りを覆う戦いの気配を感じた。と同時に視界に飛び込んできたのは戦乙女とその横に立つ存在。

「不死者王ブラムス！」

あの時、最後まで続かなかった言葉をもう一度言った。

「嘗て我が居城に入り込んだ鼠か。懲りずにまた私に挑むのか？」

「じよ、冗談じゃねえ！……二度と御免だ。」

言い終えると同時にファルクスは二人の先の存在に照準を合わせ身構える。

その手が握る大剣は、優美な曲線を描いていた。

五更・戌夜（ぼや）（後書き）

五更・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763d/>

五更

2011年10月3日19時44分発行